

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：17601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12878

研究課題名(和文)『説文解字』における字体の定例

研究課題名(英文)Regarding the conventional scripts used in the Shuo Wen Jie Zi

研究代表者

山元 宣宏 (yamamoto, nobuhiro)

宮崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：60571156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：漢字の書体名として「篆書」「隸書」という名称はあまねく知られているが、命名の由来は明らかでなかった。そこで私は、書体の名称が前漢末期まで遡ることを指摘しながら、命名の背景に漢代の經学における今文・古文の学派对立が反映されているという新説を提示し、命名にこめられた企図を体系的に探ることによって、古代書体の全体像を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：When it comes to the form of the written Chinese characters, the names ' 'Zhuanshu' and ' 'Lishu' are widely known, but the origin of the names were not clear. It is there that I realized there must have been struggled between "Jin Wen" And "Gu Wen" and pointed out that the names go back to the late Han Dynasty. presenting a novel that shows the factional conflicts of the present and old in the Han Dynasty's period's education, as reflected in the background of the name. And by systematically exploring it, I revealed the whole origin of the ancient form of the written Chinese characters.

研究分野：中国文字学 書道史

キーワード：説文解字 古文 今文 書体

## 1. 研究開始当初の背景

ここ数年中国各地の戦国秦漢期遺跡から、当時の通行書体であった篆書や隸書で書かれた簡牘の発見が相継いでいる。

そこに使われている「篆書」や「隸書」という名称は、文字学や書道史の研究領域においてはもちろんのこと、さらに印鑑や印刷のフォント名などを通じてあまねく人口に膾炙している。

しかしそれらがなぜ篆書あるいは隸書と命名されたのか、その正確な理由はまだ解明されていない。

篆書あるいは隸書という名称の由来は、漢字の書体をめぐる文字学史研究では従来ほとんどスポットをあてられてこなかった分野なのである。

そのため、この研究は文字と人間の文化を広く総合的にとらえようとするもので、文字を表記する行為にまつわる分野における今後のあらゆる研究活動に対して重要な方向を明示するものである。

さらに、芸術史と文字学、文献学などの領域にわたる学際的な視点をも備えたものといえるだろう。

そして文字と人間の文化を通じた国際交流を積極的に促進する機縁となるに違いない。

またその考証にあたっては文献と従来の研究ではほとんど用いられることのなかった考古学的出土物との融合的解釈によっている。

文献と実物資料の統合を志向する研究として国際的関心にそっているといえよう。

## 2. 研究の目的

篆書や隸書という名称が最初にまとまって記述される文献は、『漢書』藝文志と『説文』叙、それに荀悦『漢紀』など後漢時代の史料である。

『説文解字』叙によれば、葬新の時に六体があり、先んじて秦代には八体があったという。

このような書体の名称に関する先行研究として啓功『古代字体論考』がある。

しかし、啓功は個別の書体名を、文献を中心にたどることに終始しており、一貫した体系としてとらえたものとはいえない。

また近年には裘錫圭『文字学概要』が篆書や隸書に対して示唆に富む解釈を展開する。

しかし、それも仔細に検討すれば全面的に首肯できるものではないのである。

また裘氏の指摘をうけてそれを深めようとする議論もほとんどないのが現状である。

つまり、書体名に関する従来の研究は文献の記述に偏重したアプローチのみであって、書体を近年の出土資料と照合し、その名称のよってきたる所以を考察しようとする方法はほとんど存在しなかったといえるのであ

る。

中国文字学史から個々の名称自体への考察はなされるが、肉筆資料と有機的に結びつけるような一貫した視点がなかったといえる。

そこで、『説文解字』における字体の定例を研究の目的とする。

## 3. 研究の方法

最初は名称が存在しなかった書体に対して特定の名称が与えられたモチベーションを考察することは、文字をめぐる文化がその時代にどのように位置づけられ、さらにそれば当時の社会に対していかなる影響を与えたかを考えることに直結する。

本研究のもつ意義として、これまで正面から考察を加えられることがほとんどなかった問題について正面から取り組んだことである。

その方法として考古学的出土物として近年豊富に発見される簡牘資料を積極的に援用して、その記述と解釈を通じて書体命名の背景を分析する方法をとる。

これまで簡牘資料は主として秦漢代を中心とする古代史解明のための資料として使われるのがほとんどであった。

しかし、本研究は漢字研究のもっとも伝統的な枠内に位置するにもかかわらずこれまで未解明であった部分にスポットをあてている。

その点で中国文字学および書道史研究の歴史と今後の展望の中での一つのたたき台となることを目指している。

## 4. 研究成果

『説文解字』に使用されている字体の定例を確定するための具体的な調査を行った。

『説文解字』に収録されている籀文とは、大篆のことである。

古文と籀文の関係を論じたのが「戦国時秦用籀文六国用古文説」をはじめとする王国維の論考である。

王国維の説に対して出土文字資料を用いて比較検討を行った。

まず史籀篇とは王国維がいうような春秋戦国の間に秦人によって作られたものではなく、西周末に学童の識字教材に供する為に当時の通行字体を編集したものであることが明らかになってきた。

そしてそれは、秦地のみで行われたものではなく、各国へ継承されていったが、結果的に立地条件や種種の事情で周の遺制を色濃く残す秦地で根強く継承されたことをお実証した。

さらに、東方各国においては徐々に使用されなくなり、戦国期に至っては、秦と東方各

国との使用の差異は、顕著となっていたのである。

この戦国期における『説文解字』に収録された古文の見解は、王国維の見解がほぼ正しいことが明らかになった。

実際の籀文をみると、籀文は結構が繁重な文字だととらえられているが、小篆とあわない文字だけが『説文解字』の籀文として挙げられていることも明らかであった。

したがって大部分が小篆と同じであって、小篆よりも結構が簡素なものもあり、籀文と小篆間は、すべて省改関係にあるわけではないのである。

ここで許慎は明らかに大篆と小篆を継承関係で捉えたい意図があることがうかがえる。

大篆と小篆という名称からも明らかのように、そもそも史籀篇を大篆といい、李斯の倉頡篇・中車府令趙高の爰歴篇・大史令胡毋敬の博学篇に小篆という名称を名付けることに古文学派の企図がみえてきた。

書体の名称が存在するという事は、そこには必ず命名者の企図が存在するはずである。

この視点から書体名称が前漢末期まで遡ることを指摘し、その背景に漢代の経学における最大の問題であった今文・古文の学派对立が反映されていることを明らかにする。

そして王葬六体、秦書八体の書体の名称に対して、古文学派の企図という一貫した視点で、個々の書体がいかなる意味であるかを考証している。

書体はその形式上からの研究が普通であるが、中国思想史上の今古文論争の政治性を深く追求した。

そして隷書とは、古文学派が今文学派の文字を貶めるために使用した呼称とする新鮮な説を提起した。

隷書との対比にたって、なぜ「篆」という文字が使われたかを論じ、そこに古文学派における『周禮』という書物の重要性和特殊性を明らかにした。

『説文解字』叙における書体の名称と次序を中心に、従来は看過されてきた書体の命名にこめられた企図を体系的に探ることは、秦漢時代の書体を通じて、漢代の今文・古文対立の新たな側面が浮き彫りになったのである。

その成果をその成果として『古代書体論考』京都大学学術出版社(2016年11月)をまとめることができた。

さらに急就篇の文献的性格を明らかにし、章草という書体の名称に再検討を加え古代書体の諸相を全面的に解明した。

『急就篇』は、唯一完全な形で現存する漢代の小学書である。

その内容から当時の識字書と考えられている。

識字という点から、学童の為の識字書であると考えられることが多いが、『急就篇』の

取り上げている語句の内容をみれば、かなり専門的な語句が列挙される。

そこで『急就篇』の性格について当時の官吏任用と小学書との関係を踏まえて、『急就篇』の内容を検討することで、『急就篇』の文献的性格を明らかにした。

なお、その成果は台湾の淡江大学において開催された、『漢字文化圏的文化世界化』2017學年 國際學術研討會(2018年1月4日)において「急就篇」考として発表をおこなった。

また、本研究の成果を現代の漢字問題との関連や一般向けの為に、次のような活動を行った。

一般向けに紹介するものとして、『「成り立ち」「書き順」を知れば美しく書ける 漢字かきかた練習帳 改訂版』鉦脈社、全112ページ、2017年6月を上梓した。

古代文字「篆書」から漢字の成り立ち、変遷を解説している。

書き順の意味がわかって、おのずときれいな字が書けるような一般向けの漢字練習帳である。

本書は、古代の字形を通じて、主に成り立ち等のさまざまな知識を紹介しつつ、実際に書き込んで練習できる教材である。

また、現代の漢字との関わりでは、「日本公用漢字和其争論点」『中国学』第52輯、大韓中国学会、(p1-p5)2015年9月を発表した。

現代社会で使用している公用文字である常用漢字の問題点を、漢字の成り立ちや古代の字形或いは旧漢字からの分析を通じて論じたものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山元宣宏「日本公用漢字和其争論点」『中国学』第52輯、大韓中国学会、査読有り、(p1-p5)2015年9月

〔学会発表〕(計 1 件)

山元宣宏「急就篇」考『漢字文化圏的文化世界化』2017學年 國際學術研討會(2017年1月4日)台湾 淡江大学

〔図書〕(計 2 件)

山元宣宏『「成り立ち」「書き順」を知れば美しく書ける 漢字かきかた練習帳 改訂版』鉦脈社、全112ページ、2017年6月

山元宣宏『古代書体論考』京都大学学術出版会、全256ページ、2016年11月

6. 研究組織

(1)研究代表者

山元 宣宏 (YAMAMOTO NOBUHIRO)

宮崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：60571156

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )